

(体育科)

## 表現の楽しさや喜びを味わい、運動への意欲を高める体育学習

大阪市内天下茶屋小学校 研究部

### 1. 研究主題設定の理由

本校では、「21世紀をたくましく生きる“天茶っ子”の育成」という学校教育目標のもと、「よく学ぶ子」「思いやりのある子」「強い元気な子」の3つの視点を推進し「知・徳・体」の能力をバランスよく兼ね備えた子どもの育成を目指して生きる力を育む教育を進めている。

コロナ禍による外出自粛、運動会の中止などが相次ぎ、外で遊ぶ機会が減ったこともあり、子どもの体力低下が顕著にみられるようになった。また、学年が上がるにつれて体育学習に対しての苦手意識や学習意欲の低下が児童への意識調査から明らかとなった。そこで、令和5年度から研究教科を体育科の表現運動に設定し、「運動する楽しさを知り、生き生きと取り組むことができる体育学習（表現運動）」の研究を進めてきた。特に1年目の研究では、得意か苦手かという固定観念にとらわれず、表現運動を通して体を動かす気持ちよさや楽しさに気づかせることを意識した授業展開の工夫を行う研究を進めてきた。

### 2. 研究の趣旨

本校では1年目にあたる令和5年度より研究を進める上での大きな課題として、これまで表現運動を指導した経験がない指導者側のスキルを高める必要があった。表現運動の特性である自己の心身を解き放して、イメージやリズムの世界に没入してなりきって踊ったり、互いのよさを生かし合って仲間と交流して踊ったりする楽しさを味わうことができるようにするためには、自由に表現できる雰囲気づくり、言葉かけはとても重要であった。指導者が笑顔でいろいろな動きになりきり示すことで、はじめは不安や恥ずかしさを持っていた児童も楽しんで取り組むことができた。さらに研究を深めていくためには、他領域と違いゴールフリー型の運動である特徴を十分に生かした上で、よりよい動きとは何か、深い学びを実現させるためにはどのような題材を設定すべきなのか学習過程を追求していかなければならないと考えた。特に仲間との関わり合いの中で、自己の課題やグループの課題をつかみ、これらを解決していく力も育みたいと考えた。

そこで、2年目である本年度は体育運動全般的に親しみをもって取り組むことができるように研究主題を「表現の楽しさや喜びを味わい、運動への意欲を高める体育学習」とし、次の3つの視点で取り組みを進めた。

### 3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点①題材からのイメージを結び付けながら4つのくずしを段階的に取り入れる
--------------------------------------

4つのくずしを取り入れると動きが高まるのに加え、子どもたちは運動すること、表現すること、話し合うこと、工夫すること、動きを作り上げることの楽しさを実感できるようにする。

<4つのくずし>

- |          |                                   |
|----------|-----------------------------------|
| ・空間のくずし  | : 踊る方向や場を変化させ、同じ場所だけでなく場を広く使って踊る。 |
| ・体のくずし   | : ねじったり、回ったり、跳んだりなど体の状態をはっきり変える。  |
| ・リズムのくずし | : すばやく、ゆっくり、急に止めるなどの動きのリズムを変化させる。 |

- ・人間関係のくずし：離れたり、くっついたり、からんだりなど、いろいろな友だちとかかわり合いながら踊る。

#### 視点②仲間と関わり合う場の設定

仲間と表したいイメージを共有する場面を設定し、肯定的な他者評価を受けてから表現した動きを明確な観点で自己評価する活動を行うことにより、運動に対して自信をもち運動への意欲を高めるようにする。

#### 視点③動きを工夫し自信をもって表現する

自分の中にあるイメージをいろいろと工夫して全身を使って表情豊かに動くことを楽しんでいることが自信をもつことへとつながると考える。指導者は多様な動きを引き出すことができるように、抽象的な言葉ではなく、子どもたちが具体的に動きをイメージしやすい言葉（オノマトペの活用など）に言い換えるよう心がける。

例：) もっと速く → 新幹線のように速く

ゆっくり → 足音をたてないように

風が吹いてきた → 風がヒューヒュー吹いてきた

## 4. 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

#### ○音楽の工夫

準備体操を兼ねたほぐしの運動で使用する BGM の使用は動きを活性化させ、とても効果的であった。特になりきって踊ったり表現したりすることを目的とする場面ではイメージが広がりやすく、より世界観を自由に表現することができる手立てとしては重要な役割を果たしたと考えられる。

#### ○場の工夫

指導者がイメージの世界に没入して表現することで児童はそれを参考に少しずつ自分の表現を見つけ始めるため、指導者自らが心と体を開放してなりきることは大切な要素であった。また、題材のイメージをとらえやすくし、思わず動いてみたくなるような絵図や映像による刺激はたいへん効果的であった。さらに、動きを高めるための手立てとして見合う場面を十分に設定することで、動きが単調になってしまっている児童は仲間の表現に触れることで自分の動きのバリエーションも増やすことができた。

今年度はリズムダンスに絞って研究授業を実施したが、どの学年の児童もリズムの違いを意識して仲間と楽しみながら踊ることができた。また、見せ合う場面を設定することで踊る側は相手に伝わるように強調した動きを生み出し、意識して表現した部分が他者から評価されることで、動きの一つ一つに自信をもって表現することができた。

### (2) 今後の課題

○子どもたちに「くずし」の視点を理解させ、動きの中に生かしていくようにするための手だては「具体的な声かけやアドバイス」と考えて行ってきた。身につけさせたい動きとは何か。どのタイミングで取り上げるのか。指導者がそのような視点を明確に持ち、意図的に気付かせる場を設けるなどことで紹介された児童は達成感と成熟感など自己肯定感が高まる。今後も表現運動の機会を増やし指導者のスキルを高めていきたい。

○今後も表現運動を継続して行うためには、低学年のうちにリズム遊びや表現運動に十分慣れ親しむことが重要であるため、系統立てた指導計画を作成していく必要がある。